

手・キのたをしたロボットを手に置き、脳を動かす川光男・ATR脳情報研究所長。左のパソコン画面はMR内の様子、右は脳の画像データを示している。21日、東京都江東区、恒成駒幸撮影

“以心伝心”ロボ

脳内情報でロボットを動かす仕組み

- ① チョキを出した人の脳をMRIで計測
- ② 運動指令のデータを抽出
- ③ ロボットハンドが同じ動作

脳の情報を読み取り、動きを伝える技術の両方が得意な川光男が、この技術の応用で将来、体が動かさなくなった患者を救いたいという思いで、ATR脳情報研究所で、動きを伝える際の脳の情報を読み取り、ロボットハンドに送信した。その結果、85%の正確さで、ロボットに同じ動きをさせることができた。

MRI活用、脳の情報送信

現在、被験者が手術のリスクがない状態で、長い訓練を要するが、脳を信じているが、1年以内で、手や腕の動作に脳の情報を伝えることが、近未来の研究チームは、近未来に脳波出力装置を組み合わせて、脳情報を読み取り、脳を動かすことができるようにしたい。医療・福祉分野での実用化を目指す。脊髄損傷や筋萎縮性側索硬化症（ALS）の患者の回復を促している。研究チームの川光男は「頭の中を動かすというイメージで、10年後の実用化を目指している。」と話している。（日本智）

医療・福祉で実用化目指す

現在、被験者が手術のリスクがない状態で、長い訓練を要するが、脳を信じているが、1年以内で、手や腕の動作に脳の情報を伝えることが、近未来の研究チームは、近未来に脳波出力装置を組み合わせて、脳情報を読み取り、脳を動かすことができるようにしたい。医療・福祉分野での実用化を目指す。脊髄損傷や筋萎縮性側索硬化症（ALS）の患者の回復を促している。研究チームの川光男は「頭の中を動かすというイメージで、10年後の実用化を目指している。」と話している。（日本智）

朝日新聞社より使用許諾済(転載厳禁)